

東日本大震災の女性の記録

田村弘美さんとの会話 —ローリエ（月桂樹）にたくした思い—

インタビュー時 50代

2020年6月21日

聞き手 千葉直美

晴れ渡った6月のある日、田園にある農園を訪れた。田んぼの中の初めての道を通り、迷いながらようやくたどり着いた。鳥のさえずりが聞こえる山際に立つ家屋で、笑顔で出迎えてくれた女性は田村さんという。3.11の震災で25歳の息子さんが犠牲になった。

—ご実家の家屋の一部を改造して、震災を伝える写真や資料を展示するギャラリーを開設している。ギャラリー内を歩きながら、静かに語るようにお話しが始まった。

「あの日、私は内陸にある職場にいました。女川の海沿いの銀行に勤める息子とは、2～3日後には会えるだろうと思っていました。勤務中だった息子が行方不明だと知り半年間、毎日一日中、海岸沿いを探して歩き回りました。おにぎりを持って行きましたが、食べる気がしませんでした。季節も感じず、色というものが目に映りませんでした。魚の匂いがしたことは覚えています。7月初めに、夏が来たことを知りました。ライトブルーの海が、とてもきれいだと感じたのです。行方不明になっていた、同じ銀行の女性が最初に見つけたのは、7キロ先でした。息子は、どこか離島で生きているはずだと信じていました。

息子は東京の大学へ行きましたが、故郷に貢献したいと宮城県に戻って来たのです。親孝行したかったようです。無理して帰ってこなくとも、自由に好きなことをさせればよかったかなあとと思います。その年の9月26日に息子は見つかりました。私は銀行を信用していました。“屋上に避難した”としか私達家族には知らされませんでした。悔しく、憤り、怒りでいっぱいでした。どうして、走れば1分の山に逃げなかったのか？息子の最後の様子を知りたい。」

—窓から、ゆっくり風がそよいで入って来る。まぶしい光もそそぐ。二人でソファに座る。私は、まだ目の前に座る初対面の田村さんをまっすぐに見ることに、ためらいを覚えている。新聞等で裁判の様子を読んでいたが、そのご本人に、こうしてお会いできていることが信じられない。

「銀行を憎んでいましたが、今は、女川の慰霊碑の前で訪れる方々に当時の事を話し、二度と同じことを繰り返してほしくないという震災を伝える活動をしています。遺族が現場で語ることに意味があります。従業員は会社に従わざるをえず、勝手に行動できない体質があります。上司の指示に簡単に逆らえるのでしょうか？私は、検証し解明し再発を防ぎたいのです。“やむをえない”、“想定外”ではすまされません。失っても“しかたない”命は、ありません。どの組織も企業も、従業員の命を最優先に守る意識を持ち、よりよい防災体制を整えてほしいのです。遺族と協働で。

私には3.11を発信する使命があり、未来の防災のために語らざるをえません。知ってほしいのです。当時は信じられないという気持ちで現実を受け入れられませんでした。今はようやく、らくに話せるようになりました。

—本当に大変な9年間でしたね。何が田村さんを、支えてきたのですか。

「あれから、いろんな人に出会いました。たくさんの支援をいただきました。人と会うことが救いであり励みでした。私の話に耳をかたむけ聞いて寄り添ってくれました。たくさんの人が力になってくれ、おかげで暮らしてることができました。悶々と一人で泣いているしかないのかと、ふさいでいましたが、私の思いを共有し手を握ってくれる人の温かさに勇気ももらいました。

一しばらくして外へ出て、農園に案内して下さった。そこには樹齢60年以上の、10メートルもの高さのローリエ（月桂樹）の木が立っている。“健太 いのちの農園”も含めて、ローリエにこめた思いを教えてくださいませんか？

「ここは、私が育った実家です。自然に囲まれて植物や野菜を育て、その命に触れ体を動かし汗をかき、土に触れていると癒されました。おだやかな気持ちになりました。息子（健太さん）も幼いころ、よく遊んでいました。この場所は、健太と向き合い、死を受け入れ命を活かす所、つまり死者を受け入れ死者を活かす所なのです。3.11を忘れないように。すると、ローリエの木があることに気がつきました。ずっと、そっと黙って私達を見守ってくれたたいたのですね。魂が宿っています。

支援して下さった方々に、何かお返しがしたいと思い、このローリエの葉を摘み、熱湯消毒して乾燥させ、袋に詰めて全国の方々に送りました。とても香りがよく、お料理や匂い消しとして使えます。花言葉は、勝利と栄光です。命のシンボルです。この葉を通じて、命の輪が広がればと願います。

一まっすぐに伸びるローリエの木を見あげる。

「親として息子にしてあげられることは、伝え続けることです。健太には産まれてからたくさん楽しみをもらいました。野球少年だったのですよ。健太の命を通じて、命の尊さを語れるのは親しかできません。被災地の風景は変わっていきますが、細く長く伝える活動を続けていきたいです。3.11以外の、自然災害や事故で家族や親しい人を亡くした方々ともつながる機会もできました。」

一まぶしく輝く日差しに包まれながら、外に置かれたテーブルとイスに座り、お茶をご馳走になった。“また来てくださいね”と大きく手を振って見送ってくれた田村さん。帰り際にいただいた、たくさんのローリエの葉で、車の中がいい香りでいっぱいになった。

